

日本神道と国家神道

令和七年五月十五日

大中臣正比呂 記

「欧州にはキリスト教以前の古代異教 (paganism) が今も残っている。その異教の冬至の祭典に、キリスト教会は抗することができず、その日をイエスの誕生日にしてしまったのがクリスマスである。」

年が代わる一月は、ローマ神話の双面神ヤヌス (Janus) の月で、始まりと終わりの神であることが、英語 January の由来である。古代異教は欧州土着の宗教であり、共同体の外には出てゆかず、共同体の存在と切り離せない。そこには、教義も十字軍も異端も存在しない。

欧州古代異教と同様、神道は日本という共同体限定の民族宗教である。イザナギ、イザナミの夫婦神はオオヤシマ (日本) だけを創生して国生みを終えていることから分かる。当然ながら、日本書紀に見る八紘一字の対象は日本だけである。」

(以上、『靖国』令和七年五月号、青山学院大学大学院教授 福井義高先生
論考より抜粋)

靖国神社は大東亜戦争の敗北によって国家神道を脱ぎ捨てたが、靖国神社に合祀されてきた戦没者は「・・・の命 (みこと)」と呼ばれ「カミ」になる。昭和天皇は戦前、戦中、戦後も靖国神社を参拝されていたが、昭和五十年八月に三木武夫首相の参拝が、



急に「政教分離」の憲法違反であるとする政治問題化が起こり、同年十一月を最後に参拝されなくなった。

昭和五十三年に当時の松平永芳宮司が「昭和殉難者」(極東軍事裁判のA級戦犯者) を合祀したからであろう。元海軍少佐の松平永芳は、請われて宮司となったのである。その点で靖国神社側の意図は明確である。

元々、徳川討幕の戊辰戦争、日清戦争、日露戦争、大東亜戦争の戦没関係者を等しく祀る国家神道の神社であったのだから、A級戦犯であっても合祀は当然である。

しかし天皇は、国民統合の象徴と日本国憲法にあることから、戦争責任を負うと自覚されている昭和天皇は、政治問題化して国民統合の象徴に反するとの議論を見越して、参拝をされなくなったのである。それは今上天皇まで続いているのだが、天皇は春秋大祭に勅使派遣を続けておられるし、天皇以外の皇室の参拝も続いている。

国家神道の神々には、「妖怪」は存在しない。但し、首相官邸には今も大東亜戦争時代の政治家や軍人達の幽霊は出る。安倍元首相は官邸で安眠できなかつたと聞くが、今度はご自身が幽霊に出るかも知れない。

激戦地であった硫黄島に駐留する大抵の自衛官は、水を求める将兵の霊が兵舎の冷蔵庫をカタカタ鳴すという霊体験をする。輸送機のエンジンがかからないと、搭乗自衛官は機内に向かって

敬礼し「今から本土に帰ります」と言うエンジンがかかる、という有名な話もある。筆者もかつて、政府専用機で硫黄島の慰霊祭に参加したが、現地は今も地獄の様相が残っている。

令和七年四月七日に天皇、皇后両陛下が硫黄島に慰霊に行かれたが、それで冷蔵庫の霊現象は止まったと聞くので、陛下の祈りの力は尋常ではない。

明治の国家神道以前から存続する日本神道にも、「妖怪」は存在しない。しかし、日本の古代異教の中には「妖怪」は存在するようだ。この区別を明確にしておかないと妖怪の反撃が来るようだ。更に、日本神道の「カミ」として祀る「祟り神」においては、皇室の祖先の中にも、また、菅原道真のような官僚にあって、も、靈魂の慰撫を必要とする場合はある。

日本神道も縄文時代からの命脈があり、日本列島にも日高見国、出雲国、吉備国など多くの統治の歴史があり、大和朝廷とて一枚岩ではなかった。今回は聖徳太子の仏教導入についても考察を試みたい。

了

